

## 注目のキーワード「改刷」

7月3日から、新紙幣が発行されます。紙幣のデザインを新しく切り替えることを「改刷」といいます。今回は約20年ぶりの改刷となり、紙幣の肖像画は、一万円札は「近代日本経済の父」と呼ばれる渋沢栄一、五千円札は女性の地位向上や女子教育に尽力した津田梅子、千円札は破傷風の治療法を開発した細菌学者の北里柴三郎に変わります。

改刷は、主に偽造防止の目的で行われます。今回の改刷では、世界で初めて銀行券に3Dホログラム技術が採用され、見る角度によって3Dの肖像画が回転する高度な偽造防止技術が施されています。また、ユニバーサルデザインも取り入れられており、指で触った際に何円札なのかを識別しやすいデザインに変更され、額面数字を今までより大きく表示する等の工夫が施されています(注1)。

改刷の最たる目的は偽造防止ですが、新紙幣を発行することで、一定程度の経済効果もあると考えられています。金融機関のATMや自動販売機、コンビニエンスストアやスーパーのレジ等、新紙幣に対応するための改修が必要になるからです。もっとも、20年前と異なり、現在はキャッシュレス決済の普及が進んでいるため、以前の改刷時ほどの経済効果はない、とも言われています。機器の改修コストを避けるため、さらにキャッシュレス化が進むきっかけにもなるかもしれません。

7月以降は新紙幣が発行されますが、当然、これまで発行されてきた紙幣も今まで通り使用することができます。紙幣は、法律で無制限の強制通用力が保障されているため(注2)、基本的にその価値が失われることはありません。昭和に発行停止した聖徳太子の一万円札も、日本銀行の本支店に持ち込めば、現在流通している一万円札と交換してもらえます。渋沢栄一も福沢諭吉も聖徳太子も、お札の額面の価値は変わりません。ただ、そうはいてもやはり、新しいお札には心躍るものがあります。自分の手元にやってきましたら、最新の技術が詰め込まれた新紙幣を一度じっくり眺めてみてはいかがでしょうか。

(注1) 詳しくは、国立印刷局の「新日本銀行券特設サイト」をご参照ください。

(注2) 貨幣(硬貨)も、古いデザインのものを使用できる点は同じですが、通用力が枚数上限があります。「貨幣は、額面価格の20倍までを限り、法貨として通用する」とされているため、紙幣と異なり、支払いに使用できるのは、一種類の貨幣につき一度に20枚までです。ただし、取引の相手方の了解が得られるなら、それ以上の枚数で支払っても構いません。

(経済調査部 主任エコノミスト 阿原 健一郎)

### Side Mirror

このところ、大手EVメーカーの相次ぐ値下げ、人員整理、投資先送りのニュースや、EV大国である中国の景気減速から、好調だったEV販売が、一時の勢いを失っているといった報道、解説を耳にする機会が増えた。実態はどうか。

IEA(国際エネルギー機関)の「EV Outlook 2024」によれば、EV販売は(含むプラグインハイブリッド車)は、2020年の299万台から2023年には1,380万台、年平均66.6%の成長を実現。一方、足元の見通しでは、年平均成長率が2023年~2025年は22.9%、2025年~2030年は14.4%、次の5年は6.8%の伸びに徐々に減速していくとしている。EV販売シェアは、2023年には18%に達し、IEAは「主要市場でアーリーアダプターから大衆市場へと普及がシフトし、新たな局面を迎えている」としている。

EVは着実に普及が進んでいるものの、成長スピードが落ちているのは事実のようだ。アーリーアダプターから大衆市場へとシフトすれば成長は一段と加速するものだが、競うように導入された購入インセンティブ策が、多くの国で2023年に廃止されたり、縮小されたことから購入が手控えられている。加えて、充電スポットの整備が遅れていることや、バッテリーの進化が、“ムーアの法則”並みには進まないこともあり、販売が少し足踏み状態にあるということだ。しかし、内燃機関車からEVへのシフトは、脱炭素社会実現に向けた重要なピースの一つであることは変わらない。また、EVは、これから開発競争が激しくなるSDV(ソフトウェア・ディファインド・ビークル)とほぼ同義だ。EV市場の減速は、内燃機関車の復活を意味するわけではないだろう。

日本は、今のところ、EVの製造、販売では存在感が小さい。上記の「Outlook 2024」では各国の現状に言及があるが、“日本”についての言及はない。2021年、2022年の勢いでEV市場が拡大を続けていれば、日本は出遅れはなくなっていたかもしれないが、市場の成長スピードが減速する足元の状況は、日本にとって、巻き返しのチャンスだ。世界の動きをみていると、EV市場は、官民が呼吸を合わせ、協力していくことが必要だということが分かる。日本にもできるはずだ。

(佐久間 啓)